児童・生徒の身体的自己概念と自己成長性との因果モデルの検討

吉松 梓 1)
1）新潟医療福祉大学 健康スポーツ学科

【背景・目的】 身体的自己概念は、学業的側面、社会的側面、情動的側面と並ぶ自己概念の下位領域である。これまで、身体的自己概念は自尊感情や運動・スポーツとの強い関連があることが明らかになっている。特に、青年期前期に差し掛かる小学校高学年から中学生の年代は、第二次性徴と自我の発達により、身体的・精神的に急激な変化を経験する時期である。このことから、自己概念全体の中でも身体的自己概念が重要性を増すと考えられる。しかしながら、現代はメディア等の影響もあり、外見や体重など身体の見かけに過剰な関心が集まり、身体的自己概念が低下していることが課題とされている。

さて、自己形成及び自己実現に関する態度や意欲を示す概念を自己成長性という。その後の健やかな自己を確立していくためにも小学校高学年から中学生の年代において、自己成長性を高めることは重要であろう。特に、心身の急激な変化を経験するこの時期は、自身の身体に対する自己評価、すなわち身体的自己概念が自己成長性にも強い影響を及ぼしているのではないかと考えられる。そこで本研究では、児童・生徒の身体的自己概念が自己成長性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象者は、調査への同意が得られた小学 5 年〜中学 3 年の児童・生徒 164 名であり、回答に不備のない 146 名（男子 81 名、女子 59 名、不明 6 名、年齢 12.19±1.56、有効回答率 89.0%）を分析の対象とした。

調査は、2019 年 7 月〜8 月に、以下の 2 尺度および基本属性に関するアンケート調査を実施した。尺度の 1 つ目は、運動・スポーツ能力、肥満、外見、健康、柔軟性、運動頻度、持久力、身体満足感の 8 因子 27 項目からなり身体的自己概念を評価する日本語版 Physical Self-Description Questionnaire（PSDQ-J）（吉松・坂本,2019）。2 つ目は、達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなざしの意識の 4 因子 31 項目から構成されている自己成長性検査（梶田,1988）である。

データ分析は、身体的自己概念と自己成長性との因果モデルを検討するために、共分散構造分析を実施した。分析ソフトは SPSS Amos25 を使用した。

なお、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を受け、関連する利益相反はない。

【結果】 身体的自己概念（PSDQ-J）が自己成長性に影響を及ぼすというモデルの妥当性を共分散構造分析により検討した結果、適合度指標は GFI=0.78、CFI=0.75、RMSEA=0.16 であった。一般に，GFI、CFI は 0.90 以上が望ましく、RMSEA は 0.10 以上だと当てはまりが悪いとされていることから（小塩,2014）、適応が不十分であった。そのため、修正指標に基づき、誤差相関を導入してモデルの修正を行った。その結果、GFI=0.90、CFI=0.95、RMSEA=0.08 と改善され、最終モデルとした（図 1）。

身体的自己概念（PSDQ-J）から自己成長性へのパス係数は 0.63 となり有意であった（p<0.01）。この結果から、身体的自己概念は自己成長性に有意な正の影響を及ぼしていることが明らかになった。

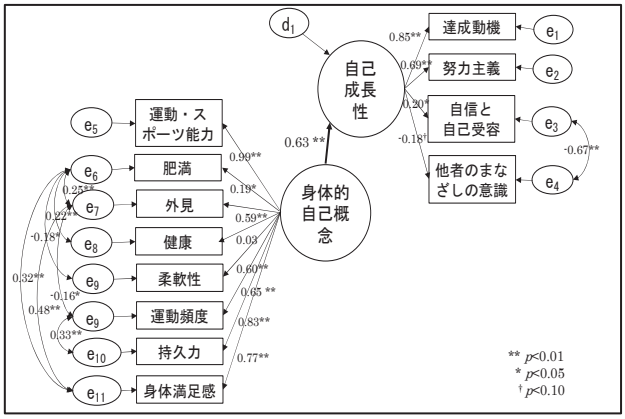

図 1 身体的自己概念と自己成長性との因果モデルの共分散構造分析

【考察】 共分散構造分析により児童・生徒の身体的自己概念が自己成長性に及ぼす因果モデルが検討され、因果係数は 0.63 と有意であり、適合度も概ね許容範囲となった。つまり、身体的自己概念が高い者ほど、自己成長性も高いこととなる。現代において、青年期前期に差し掛かる児童・生徒は、身体の見かけに過度な関心が集まり、身体的自己概念が低下していくことが問題であった。この年代において健全な身体的自己概念を育成することは、その後の自己形成や自己実現に関する態度や意欲、すなわち自己成長性を向上させるためにも重要であることが示唆された。

本研究の限界として、モデルの適合度は、修正によって GFI、CFI は妥当な値が得られたものの、RMSEA については値がやや高い結果となっている。構成概念としての自己成長性は、意欲や態度に関する側面の 2 因子（達成動機、努力主義）とそれを支える基盤となる側面の 2 因子（自信と自己受容、他者のまなざしの意識）に分けられることが指摘されており、この点がモデルの適合度に影響した可能性も考えられる。今後の課題として、上述の自己成長性の側面ごとのモデル分析や男女や年齢によるモデルの比較などより詳細な検討を行う必要があると考える。

【結論】 本研究の目的は、児童・生徒の身体的自己概念が自己成長性に及ぼす影響を明らかにすることであった。児童・生徒 146 名のデータを共分散構造分析した結果、身体的自己概念が自己成長性に有意な正の影響を及ぼすことが明らかになり、モデル適合度も概ね許容範囲となった。